

栗ヶ沢バプテスト教会 26-02-01 主日礼拝説教
「主の恵みの年」ルカ 4:16-24 木村一充牧師

この朝お読みいただいたルカによる福音書4章では、主イエスが荒野での40日40夜にわたるサタンからの誘惑を退けられた後、故郷のガリラヤに帰り、公生涯、すなわち神の国の福音の宣教をスタートされたときのことが書き記されています。イエスの時代のガリラヤは、温暖な気候と行き届いた灌漑施設、そして肥沃な土地のおかげで、オリーブやブドウ、イチジクやザクロなど、さまざまな果物が取れる豊かな地方でした。ヨセフスという歴史家によると、当時のガリラヤの人口は100万人を大きく超えていたといいます。ちなみに、私の郷里である香川県の人口は、昨年100万人を切って、90万人台になったと聞きました。さらに、ガリラヤは香川県よりも面積では一回り小さい。香川県の6割程度です。当時のガリラヤは、かなり人口密度が高かったわけです。そのガリラヤの一つの町であるナザレに建てられていた会堂が、本日の物語の舞台です。ご存じのように、ナザレはイエスの家族が住んでいた町、イエスの実家があったところであります。主イエスは、神の国の福音の宣教を、最初はユダヤ人の会堂を拠点としてなさいました。しかし、その宣教の言葉が、今日の箇所にもあるように、ファリサイ派のユダヤ人や律法学者たちから反発をまねきました。そこで、会堂での宣教をやめて、巡回伝道というかたちであちこちを巡りながら、人々に神の国のおとずれを宣べ伝えたのであります。

ここで、当時のユダヤの会堂について短くご紹介します。ユダヤの会堂はユダヤ人が住む町や村で、安息日に礼拝をささげる場所として立てられました。少なくとも家族が10世帯集まるところでは、一つの会堂を立てることが決まりだったようです。ナザレは人口の多い町でしたから、会堂も大きかったと思われます。当時の会堂は石で作られたものが大部分でした。建物の正面の入り口は南向きでした。エルサレムに向かって礼拝をささげるためです。会衆は会堂に入り、入り口を背にして座るのではなく、反転して入り口の方向にむかって、つまり南向きで礼拝をささげました。会堂の前方中央にテーブルがあり、そこには羊皮紙の上に書かれた聖書が巻物のかたちで筒状に並べられていました。トーラーと呼ばれる律法の書、イザヤ書などの預言書が、何本か大きなロールケーキのように並べられていて、その日に語られるみ言葉が書かれた聖書が、何人かの会衆によって朗読されました。安息日にささげられる礼拝は大きく三部で構成されていました。第一に祈り、第二に聖書朗読、そして第三にみ言葉の説教です。二番目の聖書朗読は、しばしば旋律をつけて読まれました。やがて、詩編の朗読が礼拝の式次第として定着し、これが賛美歌に発展したと言われています。

ユダヤの会堂には、今日の教会の牧師のような専門の説教者はいませんでした。週報にも書きましたように、会堂司と呼ばれる信徒のリーダーが礼拝の準備をし、説教者を手配し、併せて会堂の維持管理のつとめを果たしたのです。今日の箇所を読むと、この日の礼拝ではイエスが説教者として招かれたことが分かります。すぐ前の14節以下には、イエスのことがガリラヤ周辺の人々に知られ、評判がその地方一帯に広まったとあります。地元出身でもあり、会堂司としても招きやすかったのではないかでしょうか。イエスの時代の聖書は、当然ながら旧約聖書です。（新約聖書は、イエスの死後弟子たちが書いたものをまとめた書物です）ナザレの会堂にもそれが演台に並べられていました。

この日、イエスが説き明かそうとしていた聖書箇所はイザヤ書でした。イザヤ書61章のみ言葉です。「主の靈がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれて人に開放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである」第3イザヤとも呼ばれるこの預言書の著者は、イスラエルの民がバビロン捕囚から解き放たれ、肉体の癒しと魂の回復を、主である神が成し遂げてくださることを予言しました。この箇所をイエスはお読みになった。そして、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と宣言されたのです。これを聞いた人々はびっくりしました。彼らは、イエスのことを子どもの頃から知っている。貧しい大工のせがれとして、父親を助けながら家計を支えてきたかつての生活を傍で見ています。ところが、そのイエスが、「イザヤ書のこの預言は、今このとき、あなたがたが耳にした時点で成就した」と語った。いったい、それをどこで勉強したのかという驚きです。さらに、人々が驚いたのは、イエス自身が「主の靈がわたしの上におられる」と言い、「捕らわれている人を開放し、主の恵みの年を告げ知らせるのはこの私

だ」とイエスが言われたことに対してでした。ユダヤ人は、目下ローマ帝国の支配のもとにあります。彼らは自分たちをローマの支配から解放してくれるメシアを待望していました。イザヤは、そのようなメシアの到来を予言しました。ところが、そのようなメシアとして、神の国を実現するのはこのわたしだ、とイエスが宣言したのです。それは大きな驚きでした。なぜなら、イエスは人々の病を癒しましたが、反ローマのための運動はしませんでした。「どこが、解放だ」と彼らは思ったのでしょうか。しかし、今の時代もそうですが、政治体制が変わったら、神の国が来るわけではありません。私たちは、さまざまな政治上の問題、経済的問題、戦争の解決などを為政者に求めます。しかし、それらの問題を引き起こしている一番の原因が、私たちの中にある罪であることを認めようとしません。人は罪から救われなければ、本当の意味で救われたことにはならないのに、それを見つめない。目の前の問題が解決しても、また新たな問題が生まれてくる。逆に、その人の罪が赦され、そこから解放され、神を中心とした生き方に変えられるとき、自分の周りが何一つ変わらなくても、その人は自由になるのです。イエスの十字架は、人間が罪から解放し、お互いを赦し合い、愛し合うための道を指し示します。心の中に平和がないのに、どうやって隣人と平和に暮らすことができるでしょうか。イエスが説かれた福音は、すべての人を存在の深みで愛し受け入れる神の救いの始まりがありました。

もうひとつ、イエスが話したことで、礼拝に集う人々を憤慨させたことがあります。それは、イエスがあからさまに異邦人の救いを説いたことでした。二つの旧約聖書の事例が取り上げられています。第一は、預言者エリヤの時代、イスラエルの民が飢饉で苦しむとき、エリヤがシドン地方のサレプタのやもめのところに遣わされたことでした。エリヤは、そこでこのやもめの死んだ息子を生き返らせる奇跡の業をおこなっています。第二は、エリヤの弟子である預言者エリシャの時代、シリア人の武将であったナアマンが癒された話です。その当時、イスラエルにも重い皮膚病を患っていた人はたくさんいたのに、癒されたのはこの外国人一人だったと話したのです。ユダヤ人は、神の民と呼ばれるにふさわしい民族は、自分たちだけだと思っていました。ところが、イエスはこの二人の事例をあげて、神の救いは異邦人にも開かれていると説いたのです。しかも、神の救いを求める異邦人は救われたが、神の言葉を聞こうとしなかったユダヤ人は救われなかった。あなたたちも神の選びの信仰の上にあぐらをかいてはいけない。神の救いを受けるとは、神を求めるかどうかにある。たとえイスラエル人であっても、神を求めるだけ救いはなく、その際は異邦人に救いが移されるのだと、イエスは語られたのです。

選民としての誇りを傷つけられ、しかも自分をエリヤ、エリシャと同列におくどころか、自分を神の遣わした預言者だと公言するイエスの説教を聞いて、ナザレの人々は憤慨しました。人々は総立ちになって、イエスを町の外に追い出し、崖から突き落とそうとしたとこの後の29節にあります。しかし、イエスは人々の間を取りぬけて立ち去られたと続きます。これ以後、ナザレの会堂にイエスが入ることはありませんでした。私たちにとって一番大切なものは何でしょうか。それは自分の命ではないでしょうか。たとえ、人が全世界を手に入れても、自分の命を失えばそれは何の意味もありません。死んだら終わりです。しかし、主イエスは死んでも無くならないものを求めるかいと言われます。それは永遠の命です。ユダヤ人であることが、その命、救いを保証するのではありません。この世の競争に勝ち、地位や名誉を獲得することがその命、救いを保証するのでもありません。そうではなく、命の源である神の言葉にしたがうのです。神を求めるのです。

信仰生活において、卒業ということはありません。使徒パウロはフィリピの信徒への手紙で、「自分は既に捕らえた、とは思っていない」と言います。ただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がお与えになる賞与を得るために目標を目指して走ることだけ、考えているというのです。そうでないと、ほかの人に宣べ伝えながら、自分は失格者になってしまうかもしれないという。私たちも同じです。神の選びにあぐらをかくことなく、主が来られるときまで、この世における信仰のマラソンを走りぬき、命の冠を得たいと思います。4月から新しい年度が始まります。2026年度も、主の恵みの年となるように心から祈るものであります。

お祈りいたします。